



多世代がつながり、 安心の地域づくりを実現する 自主防災活動

京都府大山崎町鏡田連合自治会
自主防災組織 会長 山本 和俊



1 はじめに

大山崎町は大阪と京都の中間に位置し、明智光秀と豊臣光秀と豊臣（羽柴）秀吉が天王山の麓で天下を争った「山崎の合戦」で知られています。また桂川・宇治川・木津川という3つの大河川が合流する地で古来より交通の要所として栄えてきました。
かがみだ
鏡田地域は阪急・大山崎駅の北側の住宅街、昔大雨で水浸しになった水田が一面、鏡のようになり、のぞくと顔が映るほどだったと伝えられています。時は移り昭和20年頃から住宅地となりましたが、昭和40年代後半から計4回の内水氾濫等で被害が生じたことで、地域の防災の課題を地域の住民同士が協力し合う関係ができあがり、現在に至るまでコミュニティを挙げて防災活動に取り組んでいます。現在の自治会は470世帯、約1,250人です。

2 交流活動を取り入れた 防災訓練

地域コミュニティ形成の重要性を認識し自主防災組織結成時からこれまで、コロナ禍でも工夫を凝らしながら、役場や消防、社会福祉協議会との連携、時には警察の協力を得て「楽しい活動」をコンセプトに、子どもや親世代、高齢者が交流し協力し合う訓練（バケツリレー）を実施し、毎回100名以上が参加しています。



ふれあい防災訓練でバケツリレー

3 子ども防災 「防災オリエンテーリング」

「主体的な姿勢で防災に向き合い、家庭や地域と共に自分の命は自分で守る子どもの育成」をねらい、毎年「防災・防犯町歩き」を行い、マンホールや危険箇所、防災拠点となる施設等や110番の家等を確認し、防災・防犯の意識を高めています。



防災リーダーが技師に扮して、マンホールの話を聴いている（子ども防災オリエンテーリング）。

4 組織の担い手とリーダーの養成

組織結成時から防災活動に住民を巻き込む取り組みとして自然体験活動や、防災学習会を実施し、防災に役立つ知識の普及・緊急時の対応策の確認を行っており、地域の防災意識の高まりから、地域の方の中には、日本防災士機構の防災士の資格を取得される方も現れ、その方たちが役員となって体制強化に取り組んでいます。

5 豪雨災害を踏まえた避難のあり方

地域は水害リスクが高いという地理的特徴を全世帯と共有し、緊急時連絡網を整備すると共に定期的に避難誘導・安否確認の活動を行っています。特に災害時、自力で避難が難しい高齢者や障害者への支援には、隣近所の協力が必要であることを地域内に浸透させるため、全住民への意向調査を実施しています。

6 地域の一体性を生む取組と成果

鏡田連合自治会自主防災組織が令和5年度、「第33回京都府知事表彰」に次いで6年度「第29回まちづくり大賞」の「日本防火・防災協会会長賞」を受賞しましたが、鏡田連合自治会自主防災組織は、平成22年に設立以降、子ども・保護者・高齢者等の全世代が参加しやすく、交流しやすいイベントを重点的に実施したことで、地域に一体性が生まれ、その成果がこれらの表彰につながったと考えられますが、地域に強固なつながりを生むためには、人同士が顔を合わせて会話すること、そのた

めのきっかけづくりが最も重要であると実感します。

7 終わりに

鏡田地域は、高齢化や価値観の多様化が進む中、激甚化する災害への対応策も複雑化を増して来ています。「災害は忘れたところにやってくる」常日頃から防災を意識し、関心を持つことがとても重要ですが、地域で何も災害が起こらなければ、地域の防災意識は低下し、地域の交流がなくなれば、やがて、地域の希薄化は必ず進行します。防災は、地域にとっては、これからも決してなくならない問題ですが、逆に言えば、防災という、地域で共通した課題があるからこそ、地域の人々が協力し合おうという力が生まれるのであって、その力を最大限発揮しようとする取り組み、つまり、コミュニケーションを図り一緒に防災について考える試みを絶やさず続け、次の世代につなげることが重要であると考えています。引き続き、持続可能な地域を目指し行政や多くの支援者の方々と共に対策を講じて行きます。



町の総合防災訓練で町内防災の講話を聴いている。